

紹介

リンドストローム『フィラデルフィア・  
リージョンの経済発展 1810—1850年』

Diane Lindstrom, *Economic Development in the  
Philadelphia Region, 1810—1850*, New York :  
Columbia University Press, 1978. pp. ix, 255.

高 橋 和 男

I

ひと頃わが国のアメリカ経済史研究においても国内市場形成論は、『局地的市場圏』の構成原理の拡大としての『国民経済』の成立<sup>(1)</sup>という「比較経済学」の独自の視点と究極的な価値関心から、資本主義の「小生産者の発展」の関数的表現として、熱心に研究されていたテーマのひとつであった。その場合研究上の力点が、たとえ実際には「近代化の歴史的起点」としての農村工業の発達と、その「自然成長的な解放区」となった「局地的市場圏」の発達に置かれていたとしても、この事情は変わらない。その甲斐あって大塚久雄氏が「局地的市場圏」発達の典型的な事例としてつねに参照を求めるのが「建国期のアメリカ合衆国、とりわけ北部諸州における」<sup>(2)</sup>それであり、あるいは「南北戦争後のアメリカ合衆国」<sup>(3)</sup>のそれである。ところが、この「局地的市場圏」のその後の展開、すなわち「地域的市場圏」へのその発展とさらに後者から「統一国内市場」の形成に至る自然成長的な市場圏⇒再生産圏の拡大過程に関しては、論理的な把握と実証はともにナイーブであり、いわば「局地的市場圏」論から機械的に演繹されている。換言すれば、中村勝己氏らが検出した「局地的市場圏」は、テイラーやノースの「地域間分業＝トレード」論<sup>(4)</sup>（両者のニュアンスの差はどうあれ）によって媒介されて、国内市場の形成に架橋されているのが実情である。ノース流のセクション間分業＝トレードにもとづく国内市場形成という考え方は、アメリカではオリジナルな形で、そして日本でもノースの

国内市場の成長メカニズムの起点にあたる、もしくはそのエンジンとなる棉花及び穀物輸出(輸出基点理論)という肝心要の・Provocativeな・牙を抜かれた形で、市民権を<sup>(5)</sup>えている。

この十数年の間におきた歴史研究の潮流の変化は、「比較経済史学」にしる「社会経済史学」にしる、経済史研究の計量経済史と社会史への二極分解をもたらし、少なくとも日本に関するかぎり、国内市場形成論への以前のような問題関心は薄れ、熱心に論じられることが少なくなった。上記のセクション間分業＝トレード(国内市場形成)論の「通説」化は、長年の着実な研究成果の蓄積の賜物というより、研究者の問題関心の空洞化なり、いわば「堪え性のない」研究者の研究対象の拡散なりの結果生じた間隙にかりうじて安住の場所を得ている、といったほうがふさわしいのである。われわれのアメリカ経済史研究がノースの研究を超克したか否かはしばらく措くとしても、この間アメリカでの国内市場形成に関する研究は、理論的にも実証的にも精力的に持続されて来、注目すべき成果を挙げてきているように思われる。その結果、いまやノースの「輸出基点理論」にもとづく国内市場＝国民経済形成論は四面楚歌の状態に追い込まれつつある、といっても過言ではない。新しい研究がノースのそれに今後完全にとってかわることができるかどうかは、正直なところわからない。だが、われわれとしてもこの問題に対して安閑としていられなくなったこと、そして再度、「局地的市場圏」を起点とする市場圏＝再生産圏の発展とその「国民経済」への統合という論理的な連関のつながり具合をチェックし直し、その今日的意味を問い直さなければならなくなった、ということだけは確実にいえそうである。

ここに紹介するダイアン・リンドストロームの近著『フィラデルフィア・リージョンの経済発展, 1810—1850年』<sup>(6)</sup>は、そうしたアメリカにおける最近の研究動向を代表する成果のひとつである。本書はノースらの「輸出基点理論」にもとづくセクション間分業＝トレード論に対する方法論的並びに実証的な批判を直正面から試みたものである。著者は本書で「東部需要モデル」とよばれる代替的な仮説を提出し、この需要牽引型成長モデルによって「フィラデルフィア・リージョン」と定義された「リージョナル・エコノミー地域経済」の発展を、「成長と構造変化の過程」の観点から、巨視的・集計的に分析している。この限りでは著者の思考範型に関して何か異端の気配を<sup>(7)</sup>感じることは全くない。著者がノースと同様、アダム・スミス以来の経済成長論あるいは「新経済史」<sup>(8)</sup>の大道を歩いていることは明白であり、したがって、本書もご多分にもれず、「産業資本の社会的系譜」や「土地所有の変革」といった視点、あ

るいは「構造的視点」から縁遠いことは否めない。にもかかわらず、本書くらい「明瞭で、資料的に綿密に裏付けられた経済発展の記述」（ゴールマン）もめずらしいのであって、たしかに「地域経済」のいわば内部成長型の発展コースをその起源、過程、帰結にわたって綿密に跡付けた点は、われわれの研究にとっても参考になる筈である。

著者のダイアン・リンドストロームはG. R. テイラーの指導の下に研究生生活に入り、1970年にノースのセクション間分業＝トレード論を「雲散霧消させる」論文を発表して前哨戦に勝利して以来、アンテ・ペラム期の国内市場形成の問題を中心に矢継ぎ早に研究成果を発表してきている。本書刊行後（1980年）にG. ポーター編『アメリカ経済史百科辞典』の国内商業の項目を分担執筆していて、いまやこの分野の歴史研究者としては第一人者となった観がある。現在著者はウィスコンシン大学（マディソン）にあって歴史学と Women's Studies の準教授である。本書のもとになった学位論文『需要・市場・東部の経済発展：フィラデルフィア，1815-40年』<sup>(10)</sup>は、1974年にデラウェア大学に提出されたもので、同年、故アラン・ネヴィンズ教授を記念してコロンビア大学が設けたアメリカ経済史賞を受賞している。本書の刊行までその後4年を経ている。

本書の Style のうえでの特色は、第1に、連邦・州政府などの公文書（センサス、税関の通関記録）は言うに及ばず、企業の営業報告書、商工会議所や業界の報告書、商業誌、新聞、経済書などの原史料を丹念に狩猟して、商品生産＝流通と輸送費用などに関する多数のオリジナルな統計を作成・収録していることである。第2に、とはいえ、本書は「新経済史」の通例のスタイルとも異なり、どちらかといえば伝統的な叙述型の記述形式を採っていることである。J. アタックは、本書が一種の数量的分析の書でありながら、そのために計量経済学の分析手法を用いていないことが多くの読者には「本書の最大の価値のひとつ」であると批評している<sup>(11)</sup>。

本書は序文、本文、付録、注記、文献目録、索引から成っていて、本文の各章は次のような内容となっている。

- 第1章 アメリカの経済発展1815-40
- 第2章 商業から工業へ
- 第3章 市場とトレードを求めて
- 第4章 リージョン内トレードと輸送手段の革新
- 第5章 リージョナル・エコノミーへの統合
- 第6章 特化の経済的帰結

以下では、まず著者の接近方法と仮説を一瞥し、ついで事例研究における仮説の実証過程を詳述し、最後に紹介者の若干の注釈を加える、という順序で本書を紹介していきたい。

## II

著者が本書で採る接近方法は<sup>リージョナル・アプローチ</sup>地域〔史〕的接近と呼ぶべき方法である。第1章はこのような接近方法を用いる論理的根拠とその有効性とを論じている。それによれば、ノースのセクション間分業＝トレード論<sup>モデル</sup>のように、セクションあるいはセクター次元での一般化＝類型化から国民経済の発展の型をいきなり「ひとまとめにして」説明する仕方には論理的な飛躍があり、それに先立ってまず、それぞれの「セクション経済の発展のタイミング、速度、型」を説明しうべき理論が必要だというわけである。なるほど1840年頃には漸く顕在化してくる3つのセクション間の分業関係それ自体は各セクションの合理的な、一定の資源配分の型、つまりセクショナルな<sup>(12)</sup>特化を反映するものには違いないが、セクショナルな特化それ自体は、セクションの構成要素でありかつ固有の発展のタイミング、速度、型をもつ複数の・多様な・リージョンの間の相互作用ないし分業関係の結果であって、セクション間の商品流通の拡大(ノースはこの意義を先験的に想定しているが、それを立証する努力を怠った)<sup>(13)</sup>の結果ではない。「セクション間トレード・モデル」は「一方で南部、西部、東部のそれぞれの経済の間の差異を認めながらも、他方でこれらの経済の内部の重大な差異を認めていない」(p.8—以下、括弧内の数字はページ数または統計表の番号を示す)ということにもなるのである。地域〔史〕的接近はセクション内部の差異＝多様性を適切に把握するための方法である。

セクション間トレード論に対するこのような方法的批判は、当然その系論に対しても向けられざるをえない。諸セクションは「同時に他の商品も生産したのであって、このことがセクションをして相当な水準のセクション内自給性を維持せしめたのであった……諸セクションの主要輸(移)出商品以外の商品の高水準の生産は真に全国的な市場の形成を妨げた。実際、セクション間の商品流通量のつつましさは内実を備えた全国的市場の存在を暗に否定し、そしてたとえ強力な所得乗数が仮定されるにせよ、商品流通に関する統計はカレンダー＝シュミット＝ノース説の有効性に疑問を投げかける。」(p.7)

「セクション間トレード・モデル」に対する著者の批判のポイントは上記の「セクション内自給性」というネガティブな事実の把握<sup>(14)</sup>につきる。セクション外部の需

要源泉の意義がこのように否定されるとすれば、ではアンテ・ベラム期アメリカの工業化をリードした東部の経済発展は、いかなる需要源泉によって牽引されたのであろうか。「工業製品に対する需要の不足が東部の発展過程における決定的な隘路となっていた」(p.18)という認識は、著者がテイラーばかりでなくノースの衣鉢をも継ぐことを遺憾無く示すものではあるが、ノースがそこから「輸出基点理論」に理論的説明のいとぐちを見出した(著者にいわせればその弊に陥った)のに対して、著者は東部内部にそうした需要源泉を見出すという力業を演じている。すなわち「東部の発展のユニークな速度と型に照明をあてる」著者の仮説、「東部需要モデル」the Eastern demand model ないし the Eastern intrasectional trade model は、最広義には、国内市場=需要の成長誘発能力<sup>ポテンシャル</sup>を確認する仮説だが、東部の経済成長を牽引した需要は東部の内部から生れた、とする点で他の需要牽引型成長モデルとは決定的に異なる。<sup>(15)</sup>

この内生的な需要創出メカニズムは2つのレベルで存在した。ひとつはセクション内の諸リージョン間の分業=トレードである。もうひとつは、このセクション内分業が重要な意義をもつようになる以前の段階で第一義的な意義をもったリージョン内分業=トレードである。これはリージョン内の都市-後背地間の農・工分業で、著者が「中核一周辺間分業の相互補強のプロセス」と呼ぶ、「東部需要モデル」のエッセンスである。第1章で著者はこの「相互補強のプロセスに」について、その過程、起動力、帰結の3つの側面から理論的に考察し、いわば「一般理論」として定式化している。そして第2章以下は、「中核一周辺間分業の相互補強のプロセス」についてのこの一般的な記述を、フィラデルフィア・リージョンの発展という歴史的経験にあてはめて、その妥当性を実証していくことになる。むろん「一般理論」である以上著者の心づもりでは、「東部需要モデル」は他の3つの東部のリージョンの経済発展を説明しうるものである。

上記の地理的単位の間関係を整理しておこう。

Section*	Sub-section	Region
East	New England	Boston
West	Middle Atlantic	New York
South		Philadelphia
		Baltimore

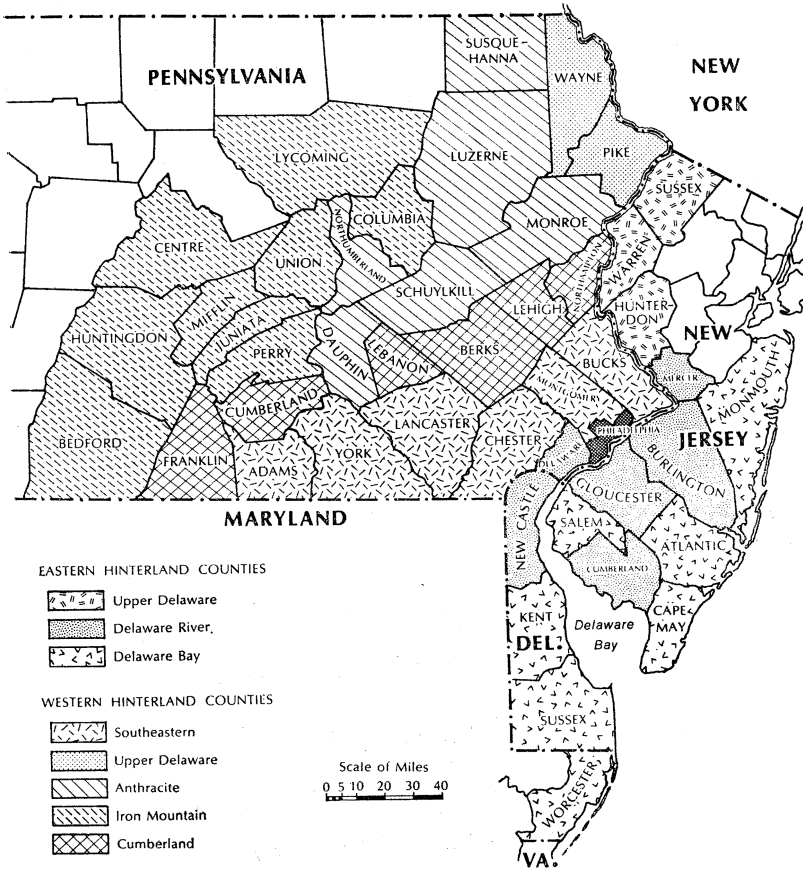
\*ノースの用語では Region にあたる。

Region=a major urban center=(core)+  
its commercial hinterland (=periphery)

III

フィラデルフィア・リージョンと命名される地域は、アレゲーニ山脈<sup>●●●</sup>以東のペンシルヴェニア州、デラウェア州、及びニュージャージー州とメリーランド州の一部

THE PHILADELPHIA REGION, 1840



からなる。リージョンの中心地フィラデルフィアと最も遠い後背地の間では 320 km くらい離れている。このリージョンの経済的特徴は、世界でも有数の穀物栽培に適した土地と埋蔵量豊かな鉄鉱床を有し、無煙炭を事実上独占し、そして卓越した工業都市フィラデルフィアをリージョンの中核としていることである。なお、ピッツバーグは西部に属する別個の再生産圏＝市場圏として暗示的に取扱われている (pp. 114, 131)。

## § 第 2 章

「中核一周辺間分業の相互補強的プロセス」の展開の発端は——起動力ではない——旧海港都市フィラデルフィアの工業都市への転身、つまり都市化＝工業化という構造変化であった。フィラデルフィア郡の工業への特化は主に二つの事情から商業資本が打撃を受けたことによるものであった。ひとつは、フィラデルフィア市が対英戦争中に築きあげた商業覇権を、戦争直後に台頭してきた綿花輸出貿易をほぼ独占するニューヨーク市に奪われたことである。これには輸出港としてのフィラデルフィア港の自然的制約（河川、湾の水結）もひびいている。もうひとつは、後背地の穀物の海外市場の不振、とくに、「穀物法」の成立によるイギリス市場の喪失である。主要輸出生産物の小麦の市場を失って「伝統的な成長メカニズムに依存しえなくなった」フィラデルフィア・リージョンにとっては、後背地の新しい特化商品とその市場を発見することが発展の条件であり、「フィラデルフィアは、それが工業へのコミットメントを再開したとき、その後背地の諸問題を解決した。」(p. 40) 著者は、雇用と所得の新たな源泉を求める後背地のこの 'push' 作用が、中核がリージョン内の工業セクターとして特化する（商業資本が産業資本へ転化する）重要な契機であったと主張する。

「フィラデルフィアがこの経済基盤ののるかそるかの移行に首尾よく架橋した」という事実は、都市中核の1810—40年の人口増加、工業部門の拡大、地価の上昇などを示す統計数値によって事後的に裏付けられている。1820年代に東部諸都市で工業化＝都市化が急速に進んだ事実はよく知られており、歴史研究者はこの現象を 'urban take-offs' と呼んでいる。著者はさらにこの間の都市中核における産業資本の質的な発展、成熟をも示唆する。まずテンチ・コックスを引用して1810年にすでにフィラデルフィアでは工業部門が多様化し、規模が拡大していたと指摘したあ<sup>(16)</sup>と、30年後に「シティは工作機械、蒸気機関、機関車、繊維機械とともに、資本財センターとして姿を現わしつつあった。この種の生産を local market manufactures として記述することはほとんどできない」(p. 46)と述べているからである。著

者にはたしかに、家内工業→マニュファクチュア→工場制工業という産業経営と生産力の発達についての段階論的理解がみられるが、「資本の生産過程」に立ち入った議論をするわけではない。むしろ著者はこの問題、つまり「供給側」の諸要因の工業化への寄与を正当に認識しているが(p.18)、本書が商品流通量の大量観察というアプローチをとる以上、「生産力論」的および「生産関係」的な分析がないことを責めるわけにはいかない。

ところでフィラデルフィアの1810—40年における急速な工業化を牽引した需要源泉に関して、著者と対立する見解がある。都市経済学者の A. プレッドはそうした都市工業が商業部門のニーズから、あるいは商業部門で発生した所得を通じて勃興したと主張する。この考え方は 'mercantile-city approach' とか 'commercial export-base approach' と呼ばれるものだが、リンドストロームはフィラデルフィアについてはプレッド説は割引かれなければならないという。というのは、「輸(移)出依存型工業」の工業付加価値に占める割合を三つのリージョン中心地の間で比較すると、ニューヨーク11%、ボストン10%、フィラデルフィア7%であり(2・8)、商業所得が都市の所得源泉(商業・海運業・工業)に占める割合を同様に比較すると、ニューヨーク59%、ボストン40%、フィラデルフィア46%(ただし工業51%)であるからである(2・9)。都市工業に対する商業部門の需要はその「規模と内容」から見て、フィラデルフィアの工業化をリードをした第一義的要因とはみなされないと、というのがここでの結論である。

ちなみに上記の2表からは副次的に、1840年頃に東部のリージョン間に分業関係が形成されつつあったことがわかる。ニューヨークの商業(59%)、ボストンの海運業(36%)、フィラデルフィアの工業(51%)というように、比較優位にもとづく特化が起こっていたのである。こうした傾向は、セクション内部の多様化=分業からセクション内トレードが拡大されるという命題を支持するようにみえる。しかしこれは第3章の主題である。同時にそこでは1820年代の 'urban take-offs' を牽引した需要の真の源泉が、ノースの「輸出基点説」に対する反証の提示を通じて、だんだんとクローズアップされてくる。

### §第3章

1852年に Israel D. Andrews は合衆国の国内商品流通のほぼ半分が大西洋—メキシコ湾ルートを利用していると評価した。沿岸商業のこのような規模から1815年頃のその規模を補外して、東部・南部間トレードの意義を強調するのがカレンダール、シュミット、ノースであり、R.アルビオンである。



沿岸商業モデルないしセクション間トレード・モデルは次の手順で検証される。  
 (1)フィラデルフィアの輸(移)出・輸(移)入の規模の測定(価額とトン数の統計)——これによってフィラデルフィアの交易相手の相対的な重要度が判断できる。(2)フィラデルフィアの輸(移)出・輸(移)入商品構成の分析(フィラデルフィア沿岸商業の積荷を輸入品と国産品とに分類する。ただし30商品だけのサンプル調査だが、それでも全委託商品の3分の2から4分の3をカバーする)——これによって合衆国の輸入代替の進行の度合がわかる。フィラデルフィアの構造変化を促した諸リージョンを特定できる。そして、フィラデルフィア・リージョンの主要生産物の石炭・鉄・繊維・化学製品に対するリージョン外の需要源泉を正確に把握できる。(3)フィラデルフィアの全リージョン外トレードを1816年、26年、37年の3つのサンプル年度について吟味する。(4)アパラチア山脈以西の西部との直接トレードの価値と構成の分析。最後に(5)外国貿易統計によるフィード・バック。

次にトレードの形態についての著者の用語法を整理しておこう。

- a. *intraregional trade*: リージョン内トレード。主に中核と周辺間のトレード。
- b. *extraregional trade*: リージョン外トレード。「フィラデルフィア・リージョンと命名された46の郡を越えた地点とのあらゆる商品交換を含む。」外国貿易もこの中に入る。最広義には *export-base theory* を意味する。
- c. *interrgional trade*: リージョン間トレード。東部の他のリージョンとのトレード。
- d. *intrassectional trade*: セクション内トレード。上記cを包摂する。
- e. *intersectional trade*: セクション間トレード。

もとより九牛の一毛にすぎないが、若干の統計表を実際に紹介しながら本章の議論の筋を把握してみたい。フィラデルフィアの輸(移)出の集計的規模を3・1表で見ると、リージョン内トレードが1830年代から50年代にかけて伸びなやむのに対して、リージョン外トレードの方は、20年代以降急成長し(そのタイミングは26年と37年の間に生じた)、50年代以前にはその速度は緩まない。著者はこれについて第1に、P. デイヴィッドの「1840年前加速説」が、第2に、著者の「致命的な経済的隘路は東部のリージョン間並びにセクション間の市場規模の制約であったという仮説」が支持されると解釈する。輸(移)出先を見ると(3・2)、1816年から37年の間に、東都への移出は24%から60%に増えて、他方南部への移出は76%から40%に減少する。前者は著者の「東部リージョン間トレード・モデル」を支持し、後者は

Table 3.1 Foreign and Coastal Tonnage Arriving at Philadelphia for Selected Years, 1816-1851

	1816	1826	1837	1851 <sup>a</sup>
Coastal-Intraregional <sup>b</sup>			212,624	219,385
Without coal <sup>c</sup>			186,216	181,365
Coastal-Extraregional	88,801	99,844	326,156	882,968
Without coal	88,801	71,431	227,139	433,480
Total Coastal			538,780	2,139,895
Without coal			413,355	614,845
Foreign	97,145 <sup>d</sup>	87,034	91,715	159,636

カレンダー=シュミット=ノース説を否定する、と解釈する。フィラデルフィアの対南部トレードが綿花ブームに沸く30年代に激減したのに対して、フィラデルフィアの工業化は逆にこの間対照的に急速に加速したからである。「だから、フィラデルフィアの1840年以前の最初の工業化を、沿岸ないし外国の市場の存在に帰することはできない。とはいえ、この時期以降のその加速は東部のリージョン間需要によってあらかた説明されるかもしれない。」(p.66)

次に1810-40年の沿岸輸(移)出商品構成の比重の変化を見ると(3・5)、石炭と繊維及び靴の伸びが目立つ。繊維はリージョン中心地の構造変化を反映していて、石炭は後背地においても「需要牽引型成長」が起こった可能性を示唆するものだという。さらに沿岸輸(移)出商品群を輸入品の再移出(3・6)と国産品の移出(3・7)に分けてみると興味深い事実が浮んでくる。外国製品の再移出は1816年には沿岸輸(移)出総額の56%、26年に63%、37年に37%を占めた。したがって1810年代と20年代に沿岸商業を支えたのは輸入品の再移出であったといえる。再移出品の最大の消費地は南部で、1816年にはその82%、26年68%、37年56%を占めた。これらの数字から判断するかぎり、南部はフィラデルフィア市場でその綿花収入を外国の工業製品(主に織物類と金物類)の購入に充てたのであり、とすれば、「フィラデルフィアの商品移出統計が示すように、北部と南部のトレードが外国製品の再移出から大部分なっていたと仮定するならば、南部市場は北部の工業発展にほとんど拍車をかけなかった」(pp.75-6)と推論するのはごく自然であろう。カレンダー=シュミット=ノース説はここでも手強い反証に出会う。他方、国産品移出についてみると、それは1830年代に沿岸輸(移)出商業全体の64%を占めるまでに成長し、しか

もそのうちの7割以上が東部に移出された。逆に南部市場のシェアは69%から28%に低下している。東部沿岸の需要が30年代にはフィラデルフィア・リージョンの新たな特化商品、石炭と繊維の生産拡大を牽引したという著者の根拠はここにある。石炭だけで、国産品のうちの非加工商品移出額の、1826—37年の増加分約410万ドルのほぼ3分の2を占めた。

フィラデルフィアの沿岸移出商品の分析から著者は、当リージョンに対する東部の2つのサブ・セクションと南部のそれぞれの需要の輪郭を描きだしている(3・8)。ニューイングランドは1810年代に食糧を、30年代に燃料を当リージョンから購入し、中部大西洋岸部は30年代に入ってから食糧、燃料、繊維を購入する。南部はフィラデルフィア市場で食糧をほとんど買わなかった。「フィラデルフィアは大穀物市場だったのだから、基礎的な食糧に関する南部の自給性という前々からの主張は追加の確証を得る。」(p.74)ここに描かれたリージョン外需要の輪郭は、既述の1816—37年のフィラデルフィアの沿岸輸(移)出商品構成の比重の変化に照応するものである。すなわち、1816年には輸入品の再移出が沿岸商業の大宗を占め、そしてこれを後背地の農産物の移出が補完していたのが、37年には石炭移出が再移出にとってかわっていた。

輸(移)出側からの以上の分析を総合して著者はこう結論する。「フィラデルフィア・リージョンの発展はリージョン外の国内需要からはほとんど起こらなかった。1820年代後半の工業活動のスパートは南部市場や東部の諸リージョン市場以外の源泉から起こった。」(p.76)

第3章の後半は沿岸商業を、これまでとは逆にフィラデルフィアへの移入商品の側から分析することである。移入商品リストの分析は、先程とは逆に他のリージョンの特化商品を剔出し、それによって東部セクション内＝リージョン間分業の展開を、したがってセクション内のトレードの拡大を明らかにする、という狙いがある。ここでも著者の分析意図がもっとも効果をあげている1枚の表だけをあげておく。ちなみに他の統計から判明することで大事な点は、フィラデルフィアが他のリージョンから購入する商品は、前者が移出する商品と驚くほど類似していることで、食糧、繊維、布、帽子、靴が両方のトレードの3分の2から4分の3を占めた。「アメリカの国内商業はまず第1に、そして大部分、家庭の消費選好を満すために仕えた。」移入品の20年間の推移を見ると、1810年代は南部のステイブル商品(綿花、砂糖、タバコ、米)、20年代はニューイングランドの工業製品(繊維と靴)、30年代はニューヨーク経由で移入される財貨(主にニューイングランドの工業製品)とい

Table 3.12 Philadelphia's Coastal Imports from New England, the Middle Atlantic, and the South by Major Commodity Classification for Selected Years, 1816-1837 (expressed as a percentage of total imports from each area)

	New England			Middle Atlantic			South		
	1816	1826	1837	1816	1826	1837	1816	1826	1837
Farm products	.3	.2	2.5	1.9	5.6	12.9	38.9	32.6	49.8
Foods	14.0	9.5	10.5	18.3	14.4	16.6	31.6	27.7	26.3
Chemicals and dyes	—	—	—	—	—	.3	—	—	—
Fuel and lighting	7.2	.6	1.5	.8	.4	.3	4.0	—	—
Metals and metal products	—	1.5	.1	—	12.4	1.0	—	.1	—
Building materials	.4	.8	.7	.2	4.8	.8	3.6	5.5	15.1
Textiles	19.8	43.3	20.8	6.6	4.4	13.4	1.5	—	.3
Hides and leather	—	1.6	2.9	—	1.5	2.0	—	2.0	2.0
Spirits and wines	8.7	6.5	.9	3.7	3.0	.7	4.6	.7	2.8
House furnishings	—	2.2	—	.1	.5	—	—	.2	—
Miscellaneous	1.6	.5	.3	1.5	2.2	.3	.8	—	—
Merchandise	48.1	33.3	60.0	66.9	50.8	51.7	15.1	31.1	3.6

SOURCE: See Appendix B.

NOTE: Based upon the variable 30-commodity sample.

うように比重の変化がみられる。

3・12表からは、ニューイングランドの繊維と靴、中部大西洋岸部とくにニューヨーク市の商業、非加工製品、穀物、への特化の様子が看取される。これらの特化のパターンに、先程のフィラデルフィア自身の石炭を中心とした資源採掘型産業への特化パターンを重ね合わせると、1840年頃に東部セクション内で形成されつつあった分業関係、すなわち諸リージョナル・エコノミーの相互依存関係の一応の構図が浮んでこよう。これまでの挙証に照らして、通説の主張するセクションの特化ではなく、東部セクション内の分業のこのような多様化こそが、東部セクション内のトレードの増大を説明するというリンドストロームの命題は、裏付けられたといっただよいだろう。だが同時に、この段階での東部の全体としての需要ポテンシャルは、東部のセクション内自給性という性格を打ち破るほど成長しなかったという事実も強調されねばならない。「実際、A.フィッシュローによれば、1839年に東部の生産物でセクションの域外に移出された量は10%にすぎず<sup>(17)</sup>、1860年にいたってもなおそれは15%を超えることがなかった(p.85)。

最後にこれまで言及されなかった西部との、著者のいう「遠隔地市場」との、いわゆるセクション間トレードについて一瞥しておこう。フィラデルフィアにとってこのリージョン外トレードは、1816年から37年までの間一貫して増加し続け、しかもこの間つねにフィラデルフィアの出超という有利なものであった。だが37年に680万ドルに達した後、移出額は40年代に頭打ちとなり、49年には620万ドルに落ちる。とはいえ西部市場の意義は決して軽視されてはならない。対西部トレードを示

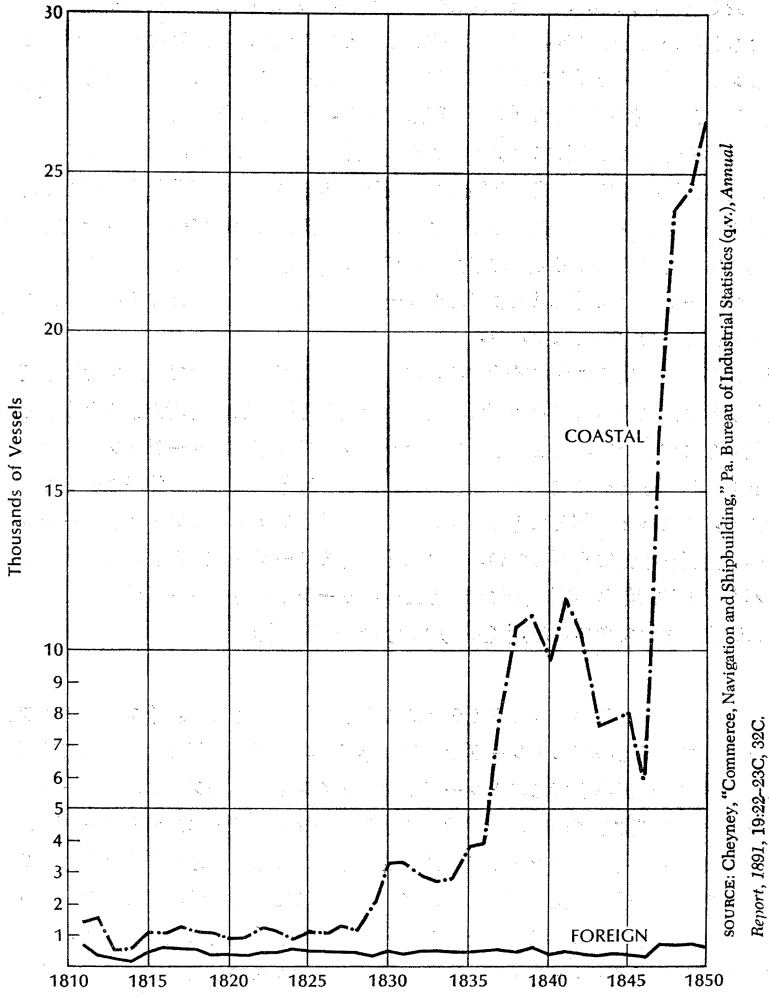
す統計表(3・13)とすでに言及した国産品の沿岸移出先を示す表(3・7)を見くらべるとおもしろい発見をする。著者は3・7表をひとつの根拠に、30年代後半の東部セクション内市場の成長(この裏面は南部市場の衰退)を強調したが、その絶対額は526万ドルで、西部市場の680万ドルの77%である。というより、西部市場の規模は南部と東部を合わせたそれにわずか6.5%しか劣らないのである。40年代に入ってから西部市場の成長率の鈍化と絶対額の低下、あるいは東部市場とくらべた相対的成長率は、セクション内分業の段階における需要源泉についての著者の解釈とうまい具合に整合するにしても、20年代、30年代の西部市場はその絶対的規模のゆえに東部のリージョン間需要以上に(だがリージョン内トレード以上にはではない)強調されねばならないのではないか。

著者は第3章を次のように結論する。第1に、東部市場、ついで西部市場は急速に成長するが、両者の需要の伸びは、南部市場及び外国市場の需要減退をかううじて相殺したにすぎない。なぜなら、フィラデルフィアの東部諸リージョン、他のセクション、外国などへの輸(移)出総額は、1816—37年に14%しか伸びなかったからである。それゆえ東部と西部の市場の急速な成長もフィラデルフィア・リージョンの経済発展を十分に説明しない。第2に「東部のリージョン間需要はその最大のインパクトを1830年代中頃以降に発揮した……リージョン外トレードが加速したのはこの時点においてであった。」(p.91)(Figure 1を参照)

#### §第4章

第4章の冒頭で前章の結論のネガティブな含意が種明しされる。「フィラデルフィアとその後背地との間のトレードは、1820年代中頃以降に前例のない速度で成長した。30年代の全盛期までこのトレードはおそらくフィラデルフィアの全リージョン外トレードに匹敵していた。後背地のフィラデルフィア工業に対するニーズと、後背地の莫大な市場ポテンシャルは、地理的に定義された他のどの市場よりも、フィラデルフィアの構造変化を説明した。」(p.95)本章では後背地市場のポテンシャルが、都市—後背地間の商品流通を通して、さしあたり数量的に把握される。

フィラデルフィア・リージョンの後背地は東部後背地ないし沿岸後背地と、西部後背地とに分けられる。前者の輸送の大動脈はデラウェア川で、後者のそれはSchuylkill, Lehigh, Mainlineの三大運河系である。周知のようにペンシルヴェニア州政府はすでに1790年代から「内陸部のポテンシャルを解放し、しかもそれをボルティモアから奪い返すために全国で最も大々的に輸送手段に投資した」(p.100)実績がある。西部後背地では1820年代に無煙炭地区の開発のために運河が建設され



二五九

Figure 1: Number of Vessels Arriving at Philadelphia from Coastal and Foreign Ports, 1811-1850

SOURCE: Cheyney, "Commerce, Navigation and Shipbuilding," Pa. Bureau of Industrial Statistics (q.v.) *Annual Report, 1891*, 19:22-23C, 32C.

るようになった。このような輸送能力の改善の結果、航行可能なシーズンが延長され、廻江運賃が引き下げられて、フィラデルフィアと後背地の間の商品流通は拡大の一途を辿った。ただし、いずれの後背地でも1840年以前には鉄道は他の輸送手段に運賃で太刀打ちできなかった。

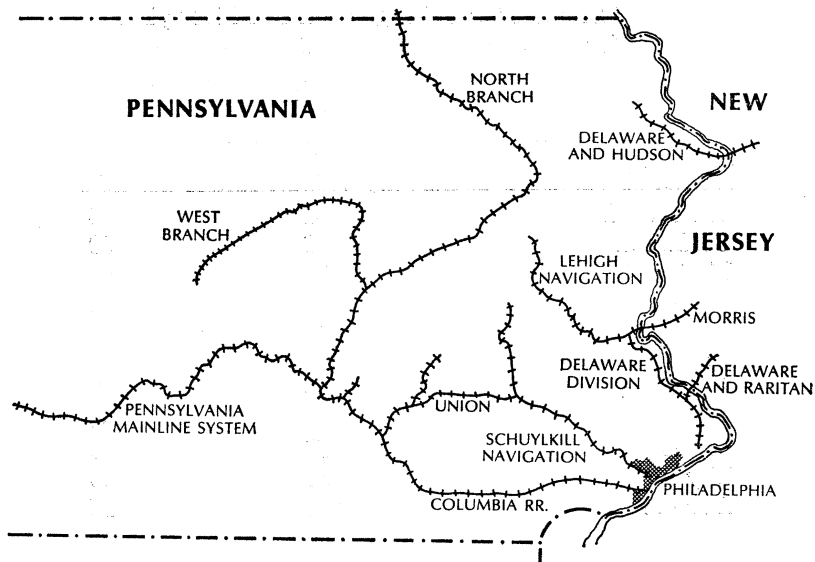


Figure 3: Philadelphia's Basic Transportation Network, 1840

三大運河系を利用したフィラデルフィアから内陸部への商品出荷額は、逆の内陸部から中心への出荷額を一貫して上回った。これは後背地市場の方が都市市場よりも絶対的な規模で大きいことを示唆している。この三大運河系を利用した西部後背地への出荷額に、デラウェア川を利用した東部後背地への出荷額、それに陸上輸送による全後背地への出荷額を加えた後背地への商品出荷総額は、著者の計算によると、1837年に経常価格で3,500万ドルから5,000万ドルの範囲内の額にのぼる (p. 109)。他方、同年フィラデルフィアのあらゆるリージョン外市場への出荷総額は、2,510万ドルであったから、後背地は明らかに主要市場を形成していたということになる。著者が「東部需要モデル」という需要内生説のエッセンスである「中核一周辺間分業の相互補強的プロセス」を始動させた起動力を後背地の需要に帰した理

由はこのようなその量的な大きさにあった。

都市中核への後背地からの出荷も、後背地の入超という事態は変わらないが、1826—40年に飛躍的に増え続けた。運河建設は後背地の鉱業部門に福音をもたらした。

**Table 4.8 A Comparison of Market Ranges for Selected Commodities by Wagon and Canal Boat, 1830**  
(expressed in the number of miles commodity was transported before transport costs equal one-half of commodity's wholesale value)

<i>Commodity</i>	<i>Wagon</i> <sup>a</sup>	<i>Canal</i> <sup>b</sup>
Stone, sand	4	36
Cordwood	6	29
Plaster	11	103
Lime	14	124
Coal	19	175
Bricks	22	201
Stone, cut	23	103
Lumber	39	280
Staves	55	563
Hay	58	350
Iron ore	58	515
Salt	66	398
Corn	73	440
Wheat	101	607
Beer	118	708
Flour	137	823
Whiskey	210	1,260
Beef and pork (salted)	244	1,467
Iron	277	1,250
Glass	387	2,326
Oil	444	1,599
Butter	611	3,667
Merchandise	972	3,500

SOURCE: *Register of Pennsylvania* (February 1830), 5:111; for prices and conversions, see note, Table 4.2.

<sup>a</sup> 18 ¢ per ton-mile.

<sup>b</sup> 1829 Pennsylvania Canal tolls plus 1¢ per ton-mile freight.



出荷総額の約40%を石炭が占め、ついで鉄鉱石と鉄が20%前後を占めた。さらに無煙炭が利用できるようになって石炭運河沿いのタウン、とくに Norristown, Allentown, Reading, Phoenixville Pottsville などに鉄工所が蟻集するようになった (pp.103-4)。著者の仮説の一般図式に照らしていえば、もしこれらのタウンが、Rochester(N. Y.), Lynn, Lowell, Springfield(Mass..)などの例のように、「新工業タウン」にまで生長すれば、フィラデルフィア・リージョンの都市化=工業化の速度はさらに加速されるはずであった。が、この結果については、そして、この論点を含む後背地自身の構造変化は次章で検討されよう。

最後に、本章は輸送費用に関するオリジナルの統計を数多く含むが、ひとつだけ本書の書評で J.アタックが、‘a most interesting table’ と評した 4.8 表をかかげておく。

### § 第5章

後背地の発展を要約すれば商品生産の加速化と社会的分業の多様化であった。だがこの過程で東部後背地と西部後背地は対照的な道を歩んだ。東部後背地（その中心はデラウェア川沿岸の諸郡）は1810—40年に都市型経済に変容した。人口増加率の鈍加と農→工への人口移動（5・1）、農業の相対的衰退と工業部門の飛躍的發展、その結果として家内工業の急激な衰退（1人当り生産高は4.20ドルから0.58ドルに激減）など都市化が進んだ。要するにフィラデルフィアで生じた構造変化の過程がここでは再現された。なかでも工業生産高の増加は目覚しく、30年間に3倍以上増え（5.2）、1人当りの生産高でも約15ドルから34ドルに2倍以上増えている（5.3）。同期間中フィラデルフィア郡の1人当りの生産高が約116ドルから95ドルに、西部後背地のそれは約28ドルから19ドルに、逆に減少したのをみれば、著者が「前例のない無比の成長」と呼ぶのも間違っていない<sup>(18)</sup>（p.125）。東部後背地の工業部門はフィラデルフィア郡のそれを補完する形で成長したのである<sup>(19)</sup>。

他方、西部後背地の発展の型は資源採掘産業への特化である。人口増加率は東部後背地同様低下する傾向がみられるがそれでも30年間に83%増加する。この間人口2,500人ないしそれ以上のタウン数は3から10に増え都市化は進むが、工業タウンの成長はむしろ緩慢になる。たとえばかつて手工業中心地であったのは工業タウンの道を歩み始めていた Lancaster や York の場合には衰退していて、工業タウンとして今後の成長が期待されるのは Norristown だけという状態にある。あるいは Easton, Pottsville, Columbia, York, Reading, Harrisburg などのタウンは「工業の結節点というより、商業の中心地」という性格が濃くなっている（以上 pp.130

—36)。著者のこの記述は西部後背地に関する部門別所得シェアの統計によって裏付けられる。1840年に所得首位は農業(小麦と家畜)で64.6%,第2位は工業で12.5%,第3位は石炭と鉄鉱石及び鉄の10.6%となっている。工業のシェアは第2位とはいえ東部後背地のその2分の1強である。これに対して、産業革命に不可欠の投入要素を供給する鉱業・金属部門のシェアと同等のシェアをもつところは他にピッツバーグあるのみである。

西部後背地の工業はなぜ「衛星都市」に蝟集しなかったのか。輸送手段の拡張と輸送費用の低下につれて、後背地はリージョナル・エコノミーの一部として組み込まれるようになって、リージョン中心地は後背地に対して比較優位に立った、と著者は推論する。その結果、「遠隔地は家内工業から、中間のマニュファクチュア local shop or factory の段階を経ることなく、地元農村以外のところで生産された製品の消費へと直接移行した。」(p.136)都市の相対的に高品質の工業生産物に対する後背地の需要の起源について、著者はこの比較優位＝都市の工業製品の急速な価格低下によって理論的には説明がつくとしている。著者自身一連の推論が「大雑把な一般化」であることを承知しているので軽はずみなことはいえないが、西部後背地における工業の相対的な衰退はいわゆる de-industrialization と呼ぶべきかもしれない。工業生産高は1810—40年の30年間に24%増えただけで(5.5, 5.9), 人口増加率(83%)にとうてい追いつけなかったからである。

西部後背地の構造変化の特質は、商業的農業の発展でもなければ、ましてや工業の相対的衰退でもなく、豊富な鉱物資源の急速な開発であった(5.4, 5.11)。「フィラデルフィアはペンシルヴェニアの鉄と石炭を基盤にして国民経済の中心たらん、アメリカのマンチェスターたらんと期待していた」と著者が擬人化していうだけの根拠があった。まず鉄生産高(この中には鉄鉱石以外に銑鉄、鋳物、棒鉄などの生産物が含まれている)は1810—40年に3倍に増えたが、これはもっぱら the Iron Mountain counties (地図参照)における急成長に負っていた。そこでは生産量は10倍に増え、後背地の鉄生産高に占めるそのシェアは18%から53%に上昇した。他方、石炭出荷量も飛躍的に伸びて、1821年の1千トン以下から40年の85万トンに増えている(p.137)。第3章で明らかにされたように、30年代末には西部後背地のこの石炭への特化が東部のリージョン間分業＝トレードの重要な要素となっていた。ところが、この目覚ましい産出高の増加にもかかわらず、the Anthracite counties の所得は、the Iron Mountain counties の540万ドルに対して130万ドルと、つまりその4分の1でしかない。この数値は、西部後背地が事実上国内の無煙炭の独占

的供給者であったことを想起するとき意外な感じがしないでもない。しかし同時に無煙炭による熔銑（「鉄と無煙炭との結合」）という熔銑炉での画期的な技術革新が起こったのが1840年頃であること、そしてチャンドラーがこのような無煙炭の産業的利用の意義を強調してアメリカ産業革命論を展開していることを想起するなら、当リージョンの特化商品に対する40年以前の需要の隘路→炭鉱地方の低所得という因果関連を理解するのはさほど難しくはない。

以上フィラデルフィアの2つの後背地の構造変化のそれぞれの特徴を概観してきた。後背地の産業構造の変化あるいは資源配分の合理化を促した要因は、前章で示唆されたように、内陸開発を通じて急速に拡大したリージョン内トレード、すなわち後背地の生産物に対する都市市場の需要の成長であった。この都市の後背地生産物に対する需要ポテンシャルに関しては、本章でも次の第6章でも計算不可能という理由で数値を挙げていないが、著者はフィラデルフィアが後背地の商品の「少なくとも3分の1」を消費したと指摘している(pp.151,158,178,180)。あるいは都市の商品需要は1810年代末の700万ドルから30年代末には1,990万ドルに上昇したとも述べている(p.178,4.5)。あとの数値は同時期の後背地の市場規模より小さいが、西部セクション市場やリージョン間市場の規模とくらべれば、4倍も大きいことに注意すべきである。リージョン内分業の経済的帰結、つまり「中核一周辺間分業」の損益計算については次章の主題なので後回しにして、著者の需要内生モデルで都市の需要が演じる役割についてここで整理しておこう。

「中核一周辺間分業の相互補強的プロセス」の展開はまず、都市中核での工業化が発端となった（第2章）。ついで都市工業に対する後背地の需要が増大することによってこのプロセスは動き始めた（第4章）。この局面では後背地の需要の規模と構成がフィラデルフィアの工業化の速度と発展の型を方向づけた。このプロセスは相互補強的な運動であるから再度局面は展開する。著者のいう「中核・周辺関係の一大逆転」が起こる。「19世紀の最初の3分の1期の終り頃にはリージョン中心地は経済発展の道沿いにその周辺をブルした。」(p.138)今度は都市の需要の規模と構成が後背地の発展の速度と型とを決定するようになって、既述のように後背地は都市の需要に応じて食糧、産業用原材料の生産に特化することで報いたのである。「相互補強的プロセス」はこれで一回転したことになる。

著者は後背地が都市市場の需要牽引に実際いかに応えたかを念を押すようにフォン・チューネンの「孤立国モデル」を用いて検証している(5.8)。その結果、Von Thunen Ringsに見事に照応した後背地の商業的農業への特化形態が検出される。

すなわち、消費地のフィラデルフィアを中心に、①市場園芸作物・ミルク・畜産品、②林産物、③ grain without fallow、④ grain with fallow、⑤バター・チーズ・蒸留酒、⑥家畜飼育・産業投入物の順に6つの環状地帯が形成されていた。

後背地はたしかに小麦輸出というその伝統的成長メカニズムの喪失の危機を克服して、新たな成長メカニズムに自己の発展のコースを転換することに成功した。国際市場の停滞のために、フィラデルフィアの小麦粉輸出(6.8)は1815-20-35-40年に19%しか伸びなかったのに対し、後背地全体の総工業生産高(5.9)は1810-40年に1720万ドルから2,770万ドルに、つまり61%増加した(1,050万ドルの増加分のうち75%は東部後背地で生じた)。フィラデルフィア・リージョン内の農・工分業が小麦輸出に代る後背地の新たな成長メカニズムとなって、後背地の経済発展は、フィラデルフィア市場の需要の規模とその構成に、そして輸送手段の改善に決定的に依存するようになった。その結果、後背地は、上記の意味での「一大移行に架橋することに成功した」にしても、それは一次産品への特化・相対的な工業化の立ち遅れという犠牲を払ったうえでのことであり、そのうえなお、人口と所得の緩慢な成長という代償を、リージョン内分業の帰結として甘受しなければならなかった。

### §第6章

最終章はこれまでの統計的資料にもとづく議論のもつ合意をより広い視野のもとで考察している。リージョン内特化=分業の利益の帰属、フィラデルフィア・リージョンの相対的に緩慢な成長の意味、そしてセクショナル・エコノミーへの統合、これらの3つに論点を大きく整理することができる。

リージョン内特化=分業は2つの次元で存在した。第一次分業ともいべき中核一周辺間の農・工分業と、周辺における第二次的な農・工分業であった(pp.157-8)。中核と周辺の工業を比較すると、中核は繊維、機械、貴金属、化学製品に特化し(6.1, 6.2, 2.6)、周辺は造船、皮革、酒、製粉に特化していた(6.1, 6.2, 5.10)。工業生産高でみると、1840年に中核は1人当たり95ドルで、周辺は同15ドルであった。さらに1人当たり所得では中核の104ドルに対して周辺の72ドルと、50%ほど中核の所得の方が高い(6.4)。リージョン内特化=分業のひとつの明白な帰結は中核の工業製品への周辺の依存であり、工業の生産性向上の果実を中核が手に入れたことである。

著者は、上記のような中核と周辺の相対的な成功度に関して、「地理的・部門的バイアスは従来十分に研究されてこなかった」として、「特化の果実の分布における空間的バイアス」をより総合的に測るために4つの尺度を利用する。すなわち、

Table 6.1 Income Originating by Sector for the Eastern and Western Hinterland, and Philadelphia County, 1840 (\$ thousand)

Sector	Eastern Hinterland		Western Hinterland		Philadelphia County		Total	
	Income	Percent	Income	Percent	Income	Percent	Income	Percent
Manufacturing	\$ 5,463	22.3	\$ 8,063	12.5	\$11,761	43.7	\$ 25,287	21.8
Agriculture	13,387	54.6	41,570	64.6	1,003	3.7	55,960	48.3
Commerce	2,542	10.4	4,767	7.4	12,230	45.4	19,539	16.9
Metals & mining	521	2.1	6,838	10.6	86	.3	7,445	6.4
Fisheries	362	1.5	22	.0	—	.0	384	.3
Forestry	1,590	6.5	1,849	2.9	35	.1	3,474	3.0
Construction	631	2.6	1,243	1.9	1,813	6.7	3,687	3.2
Total	24,496	(21.2)	64,352	(55.6)	26,928	(23.2)	115,776	

SOURCE: See Appendix C.

Note: Commodity production and distribution only.

交易条件(6.3), 1人当り所得(6.4), 不動産課税評価(6.5), 人口と純移住(6.6, 6.7, 2.1)である。「交易条件」は, 1831—35年の5年間を除くと後背地に一貫して有利で, とくに1816—20年には後背地は実質所得の増加をみてその分だけ中核の工業製品に対する追加の購買力をえた。「1人当り所得」については上述したとおりで, 付言すれば, 中核から周辺に向うにつれ平均所得は下り, Iron Mountain countiesや, 鉄と小麦と家畜に特化した Cumberland countiesで再び上昇する。「不動産課税評価」はフィラデルフィア郡で4.6倍という高い地価の上昇を記録し, 所得と同様中核から遠ざかるにつれて地価が下る傾向を示す。「人口と純移住」はリージョン全体の人口増加率が, 国民全体のそれを下回ったことを示す。フィラデルフィア・リージョンの相対的に緩慢な成長が論議される所以である。だが中核の20年代の増加率にかざれば, 全国平均を上回るほどであった。人口増加率の中核と周辺の格差は1810—40年に徐々に拡った。この間の中核での人口増加は周辺人口の流入と自然増とから起こった。前者が不熟練労働力の価格を引下げた効果をもったことはいうまでもない。だが, リージョン全体としてはこの間に人口の純移住をみた。1840年代に中核の人口は急激に増加し, リージョン全体としても純移入に転ずる。以上4つの指標に照らしてもリージョン内分業の最大の果実を都市中核が収めたことは否定できない。

ところで, フィッシュローの, いわゆる social savings に関する周知の見解では, 輸送手段の改善から生れた輸送費用の節約は, 交易条件の改善と実質所得の増加とを通じて, 周辺=内陸部の一次産品生産者にその大部分が分配された<sup>(21)</sup>とされる。しかしリンドストロームは, 特化=分業に関する上記の分析結果を根拠にフィッシュローの命題を本書の事例研究に適用することに消極的である。なぜなら, フィッシュ

一の命題は消費者需要の性格に関する彼の仮定——すなわち、需要が弾力的であればあるほど生産者が手にする実質所得利益は大きい——に決定的に依拠しているからである。ところが、著者にいわせれば「1820年代並びに30年代は農産物需要の旺盛な時代ではなかった。鉄と石炭への特化は後背地の集計的な所得を引き上げたとはいへ、これらの生産は同時に需要圧力〔需要不足〕に直面していたので、その結果生産性の向上と輸送費用の低下から生じた節約の大部分は、都市の消費者に流れたのである。しかしながら、フィラデルフィアの工業化は後背地において発生する高い所得に依存していたのであった。」(p.174) フィシュローの「社会的節約」に関する議論は著者の「中核—周辺間分業」論にとって一見有利な意味をもつと思われるのに、著者がなぜわざわざ後背地の所得に関してこのような両義的、両面志向的な議論をするのか不審に思われるであろう。だが、需要内生説の立場からフィラデルフィア・リージョンの発展を説明しようとする著者にしてみれば「中核か周辺か」ではなくて、あくまでも「中核も周辺も」でなければならないのである。

「東部需要モデル」もしくは「中核—周辺間分業の相互補強的プロセス」の仮説としての成否は、おそらくリージョン内で互いに綱を引き合う両市場のポテンシャルを立証できるか否かにかかっている、とみなしてよい。著者が土壇場に来てなお両市場の規模を測定しようと努めるのもその表われといえる。われわれもこの点を再度確認しておこう。著者の試算の結果だけを記せば、周辺市場の潜在的な規模は、3,470万ドルから3,920万ドルであったと見積られている。これは第4章で、フィラデルフィアから後背地への出荷額として見積られた額(3,500ドルから5,000万ドルの範囲内)と「驚くほど」近似した数字である。「かりにこの商品需要の半分だけでもフィラデルフィアの工業によって満たされていたとすれば、それは1840年の都市中心地の工業生産高のうに4分の3以上を占めていたであろう。」(pp.158-9) 周辺市場はこのようにその絶対的な需要の規模と構成のゆえに強調されねばならない。ちなみに著者は周辺の所得の方が中核のそれよりも工業製品の購入に使われる可能性が大きかったと推論する。周辺におけるより平等な所得分配を仮定すれば消費性向は高くなり、しかも基礎的物資(食料・燃料・建築資材)の供給能力は周辺の方がすぐれていたからである。

残念ながら中核市場の潜在的な規模については同様な計算が不可能なので、既出の断片的な指摘や数字以外に具体的な数値を知ることはできない。しかし重要なのはたしかに中核市場は集計的規模では周辺市場より小さかったとしても、中核におけるより高い人口増加率(周辺とくらべ2倍も速い)とより大きな1人当たり所得

(50%が周辺より大きい)とを考慮に入れるならば、相対的により急速に成長しつつある市場だった、という点である。けれども、中核市場のこの相対的急成長にもかかわらず、その市場＝需要ポテンシャルのゆえに中核は周辺の経済発展のポテンシャルを、その市場＝需要ポテンシャルを、完全に解放するまでには至らなかった。周辺における人口の伸びなやみと低所得水準とは中核市場＝需要のそのような規模の制約の結果であった。それゆえ「リージョン外需要の緩慢な成長が結局、石炭、鉄、小麦の生産者が直面していた共通のディレンマであった。」(p.178)。フィラデルフィアのリージョナル・エコノミーはより大きな市場に牽引されねば、すなわちセクショナル・エコノミーに統合されねばならなかった。

東部の他のリージョンや、あるいは1840年代にくらべて相対的に緩やかな19世紀初期のフィラデルフィア・リージョンの工業化に関して、従来3つの説明の仕方がある。それらは企業家精神の保守的<sup>(22)</sup>性格、地理的な障害(アレゲーニ山脈)、そして輸送手段への過剰投資、を停滞の原因として挙げる。リンドストロームによれば最後の理由は最初のそれを自ずと打消し、第2の理由にしても最良の農地と鉄と石炭の豊富な存在は十分そうしたハンディキャップを償ったではないか、ということになる。だがこれらの伝統的な説明の黒白をつけるために「1人当り所得」を測るとどうなるか。著者が「1人当り実質生産高」を代用して、1810—40年のその成長率を推計すると、年率約1%ずつの増加という結果がでる。この数値そのものが憶測の域を出ない以上結論的なことはいえないにしても、いわゆる統計的暗黒時代の1人当り所得に関するデイヴィッドの解釈——1800—40年間の1人当りの実質生産高の水準は低下もしなければ停滞もしなかった。ただしこの期間の年々の着実な経済成長という平均評価は、20年以降の急速な成長の結果である(「1840年前成長加速説」)——の妥当性がこの数値から裏付けられると著者はみているようである。ただしフィラデルフィア・リージョンの「1人当り実質生産高」の1810—37年を通じての成長率は約27%で、1840年以前のその加速が認められるにしても、デイヴィッドのいうほど(1800—40年で60%上昇)高いものではなかったとしている。

「1人当り所得」に関する以上の議論から著者は次の結論をひき出している。1840年以前のアメリカ経済は別個のリージョナル・エコノミーから成っていて、しかもそうした経済単位は「独自の成長の速度と発展の型に従っていた。」たとえば、フィラデルフィアの場合第一義的にはリージョン内の需要に応え、そして、ニューイングランドは東部セクションの需要に、そして南部は外国の需要に、それぞれ応えていたという具合に。だとすれば「全国平均を出すために別個のリージョナ

ル・エコノミーの成長率を集計することは、国民経済に関する非現実的な諸仮定をよぎなくする」(p.183)だけである。この辺は著者がすぐれた「経済学者の頭脳」をもつばかりでなく、同時にすぐれた「歴史家の眼」をもつことを示している。フィラデルフィア・リージョンの相対的に緩慢な成長が、かかる「独自の成長の速度と発展の型」を規定したリージョン内の需要の関数だとすれば、その系論として、1840年以前にはリージョン間の特化＝分業がまだ十分に発達していなかったということがいえるだろう。

事実、1840年代の10年間の当リージョンの成長の加速は目を見張るばかりであった。あらゆる経済指標が大幅な伸びを記録していて、鉄の生産高は4年間で940万ドルから2,390万ドルに倍増し、無煙炭の出荷額も10年間で400万ドルから1,100万ドルに約3倍に増えた。これらの西部後背地の生産物に対する需要は第一義的に東部セクション市場から生れた。リージョン外トレードは1837—51年に、全体で2,510万ドルから4,730万ドルにほぼ倍増したが(3.15)、この間東部市場への移出は2,670万ドルも増加した。つまり東部市場だけで全リージョン外トレードの純増加分のすべてを占めたうえに他の市場の減少分をカバーした結果になる。まさにフィラデルフィア・リージョンの「ブーム」は東部市場へのその特化、すなわちセクション内での諸リージョン間の特化と分業から生れたといえるだろう。むろん40年代の急成長から最大の利益の得たのはフィラデルフィアの都市工業でその生産高は10年間に2,230万ドルから6,480万ドルに約3倍に増えた。ついで大きな利益を得たのが東部後背地のデラウェア川流域の工業地帯であった(pp.183—5)。

フィラデルフィア・リージョンはリージョン内分業＝トレードの限界を突破して、セクション内分業＝トレードという新たな、より大きな需要源泉を、新たな成長メカニズムを、獲得した。東部の諸リージョナル・エコノミーはセクショナル・エコノミーという「ひとつの統合された、相互依存経済」に止揚された。

#### IV

以上の紹介で本書の素材的に豊かな内容と著者の強靱かつ緻密な論証力のほんの一端でも伝えることができたならば幸いである。

本書に対してさまざまな関心なり観点なりから批評を加えることが可能であろう。ここでは仮説とその説明対象との関係、仮説の「一般理論」としての適格性、そしてわれわれのアメリカ経済史研究に対してもつ意味あるいは関連、といったことに焦点を合わせて若干筆者の感想を記してみた。



フィラデルフィア・リージョンの工業化の初期の段階において、外国貿易あるいは国内のセクション間の需要でさえも必要不可欠な要因ではなかった、という著者の主張は十分説得力をもつ。著者は内部成長的、自立的な「地域経済」の形成過程を、集計的分析の許す範囲内で、曖昧さを少しも残すことなく描くことに成功している。この意味で著者の仮説の説明能力はすぐれているといわざるをえないのだが、それだけにフィラデルフィア・リージョンが偶有した特殊な諸条件にこの「モデル」はあまりにも多く依存しているように思われる。たとえば、第1に「リージョン」の範囲の設定理由が不明確である。アパラチア山脈によって西部との交通を遮断され、南部とは相対的に不利な輸送手段によって商品流通を阻害されたその地理的環境は、内陸部の開発という発展の道しか当リージョンに残さなかった。しかもその内陸部は鉄と石炭の豊庫であった。自立的な市場圏＝再生産圏が形成されやすい条件である。第2に、1815年から46年までイギリス市場からたまたま閉め出されていたために、小麦という特産物の輸出に頼ろうにも頼れなかったという特殊な、一時的な事情があった。このような自然的条件と偶然的事情に恵まれた地域では、保護関税を所与とすれば、<sup>(23)</sup>著者のいう「中核一周辺間分業の相互補強的プロセス」が自然成長的に展開することは見やすい道理である。

著者は「アンテ・ベラム期のフィラデルフィアの経験は東部の他のリージョンによって繰りかえされたように見える」(p.185)と述べているが、筆者が目にしたかぎりでも2つの書評が「東部需要モデル」の「一般理論」としての資格を疑問視している。もっとも両書評とも実際に事例研究をしてみなければわからない、とはしているが、地理的・自然的条件が異なるということも筆者の懐疑の理由のひとつだが、筆者には著者が4つのリージョンはそれぞれ「発展のタイミングも速度も型」も異なる、と何度も強調しながら、上記の引用文のようなことをいう真意がつかめない(なお序文も参照)。他方では、コ克蘭が「東部需要モデル」はニューヨークやボストンといったリージョンにも「同様にうまく適用できるであろう」としている<sup>(24)</sup>。しかし、もし著者が「発展の型」という言葉でもってたんに「需要牽引型成長」という量的側面だけを問題にしているとすれば、著者の接近方法の意義は大きく後退してしまうことになるだろう。

本書の第3章で著者はニューイングランドが東部の工業化の初期の段階をリードした理由として、その繊維工業と皮革工業が早くも1820年代にはリージョン内市場から脱け出て、東部セクション市場向けに特化していたことを挙げていた(3.12)。しかし、これらのステイブル商品のリージョン外移出によって牽引されたニューイ

ングランドの工業化の速度も40年を境に落ちはじめ、その後の20年間の成長率は以前の20年間のその2分の1以下になる<sup>(25)</sup>。これらの軽工業がもともと補完的産業を生み出さない(連関効果が乏しい)性質をもつうえに、ニューイングランドは産業革命にとって決定的に重要なインプット、すなわち鉄と石炭のリージョン内供給の点で相対的に不利な地理に置かれていたからである。他方、中部大西洋沿岸諸州の場合には「鉄と石炭を容易に利用できたことが多様な産業の発展を促したのであり、その結果として……はるかに均整のとれた工業部門をもった<sup>(26)</sup>。」ほぼ1840年頃に現われてくるポストン・リージョンとフィラデルフィア・リージョンのそれぞれ海運業、工業への相対的な特化は、両リージョンの以上のような経済構造の決して無視しえない差違を反映するものであった(第2章)。

ところで、南北戦争前のアメリカの工業化過程を多面的に扱ったコ克蘭の最近の概説書はひとつの傾向を反映していて興味深い。この本は素材的には既述の「地域経済史研究センター」の収集した史料と内部の研究資料、そしてリンドストロームの本書とから成り立っていて、いわば近年の地域経済史研究の「新総合」にほかならない。なかでもリンドストロームの「東部需要モデル」は、コ克蘭がさまざまな新素材を綜合する際の準拠枠となっているほどである。その中でコ克蘭は、「綿工業における機械化は〔アメリカ〕全体としての工業化と等置できない」と述べつつ、デラウェア州を含む中部大西洋沿岸部をアメリカの工業化の中心地域とみなす立場を、すなわち「中部大西洋沿岸史観」を、リンドストローム以上に強く打ちだしている<sup>(27)</sup>。

一口に東部といっても、以上のように内部の経済的ポテンシャルは不均等に分布していたのであって、リージョンという中間的な視点は、「局地的市場圏」から「セグメンタル地域的市場圏」への発展を、あるいは「セクション間トレード」から「全国的市場」の存在を、ストレートに導き出す方法に対して、その短絡による欠陥を補ううえで有効かつ不可欠といえるだろう。われわれの historiography においてローカルという視点はほとんど伝統化している。けれどもリージョナルという視点はセグメンタルという視点ほどにも流通していたとはいえない。とはいえ、経験的にはリンドストロームのいう「リージョン」の次元でもってアメリカ経済史を考え、研究してきたといえなくもない。たとえばこのことは、リンドストローム以前に、ニューイングランドとピッツバーグという2つの市場圏＝再生産圏を対抗的に捉えたりすることや、「ニューイングランド産業革命」から「アメリカ産業革命」を帰納してはならないという主張などから知ることができる。筆者としてはむしろ著者に海港

都市を含まない「ピッツバーグ・リージョンの経済発展」を、著者ならばどのようなモデルでもって説明しようとするのかを聞きたい気がする。

他方、リンドストロームにも「局地的市場圏＝再生産圏」の含意に近い、後背地農村における、あるいはテンチ・コックス段階のフィラデルフィアにおける、農村工業の発達つまり「農業の子孫としての工業」の発達という認識が見られないわけではない(pp. 26, 157, 158 note 2)。けれども、このローカルという次元への仮説の適用がもつ意味、すなわち、内生的な需要創出メカニズムのそこでの作用（後背地内農・工分野の発生）の意義を十分に認識しているわけではない。<sup>(28)</sup>この意味で著者の需要内生説の立場は、他の需要モデルと同様依然として不徹底であるといわざるをえない。著者が「リージョン」次元での視野の限定にとどまっているかぎり、そしてなおかつ需要内生説に立とうとするのであれば、著者は今度こそほんとうの「離れ業」を演じなければならないだろう。

リンドストロームの国内市場形成論には上記の瑕瑾以外にも、統一的国内市場がいかにして成立するのか全く説明されていないし、またその時期に関しても「1850年以降」(pp. 9, 185)と記すだけで、いつとは明確に述べられていない、というかなり深刻なパースペクティブ上の、ないしは議論の射程上の問題が、ブルーミンの指摘するとおり、たしかにある。にもかかわらず、本書は、日米双方の研究者に対して「局地的市場圏」と「<sup>リージョナル・エコノミー</sup>地域経済」への問題関心をあらためてよび覚す恰好の機縁となるであろう。

- (1) 関口尚志 「経済学史と現代」宇沢弘文・竹内啓・伊藤誠・石井寛治編『経済学と現代』東京大学出版会 1974年所収 316—17ページ。
- (2) 大塚久雄編 『後進資本主義の展開過程』アジア経済研究所 1973年 15ページ。
- (3) 大塚久雄 「金融史における国際比較の視角」『大塚久雄著作集』第9巻 岩波書店 1969年 366ページ。このように異なる二つの時期を挙げる理由について氏自身による説明はない。
- (4) 中村勝己 「アメリカ資本主義発展の特質—とくに国内市場との関連において」『国際問題』1976年 196号。
- (5) Stuart Bruchey, *The Roots of American Economic Growth 1607—1861: An Essay in Social Causation*, New York: Harper & Row, 1965, ch. VII, esp. p.159. 楠井敏朗 『『アメリカ体制』と『ジャクソニアン・デモクラシー』——アメリカ資本主義と民主主義の関連をめぐる一考察——』(1)~(3), 『横浜経営研究』(横浜国大経営学会) 3巻2号(1982年9月); 同3号(1982年12月); 同4号(1983年3月)。この未完の長編論文は、「南北戦争前期の政治的、社会的、経済的激動を総体として把握し、その原因と性格を的確に把握したいと考えている。」という、意図並びにスケールともに雄大なものである。(2号

2ページ、傍点は著者のもの) 一面では諸研究の「総合」ともいうべきこの論文においても、少なくとも産業構造レベルでは、とくにニューイングランド木綿工業に関して、1820年代にすでに地域間分業=トレードが重要な意義を有したかのように把握されている。2号13ページ及び注74)、3号31ページなど。ちなみに、「ロードアイランド型」と「ウォルサム型」の綿業資本の二類型について楠井氏の把握は従来の中村氏らの把握と異なるようである。この論点については岡田泰男「アメリカ産業革命」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、1976年所収、を参照。さらに楠井氏はカレンダー=シュミット=ノース説についても独特の解釈を示している。たとえば、「さきに見たマウント・ブレザント型の局地的消費市場の発展こそが、ピッツバーグ、シンシナティ、ルイスヴィル、セントルイス等の発展を支えた、決定的に重要な特徴であったと捉えている点で、われわれも彼のすぐれた洞察に刮目しておきたい。」と述べている(3号33ページ)。しかし、ノースの真意は、「西部」にかぎらず「北東部」でも同様にみられた「局地的消費市場」のある程度の発展も、まさにそうした市場の規模の故に、それ以上の発展を望めなかった、という点にある。「産業のローカリゼーションの増大、機能の特化、企業規模の増大、これらはみな基本的には市場の成長と関連していた。市場の成長は、1815年以後始る地域的特化と地域間トレードの成長に端を発して、1830年代の〔経済の〕拡大のうねりとともに実際に加速された。繊維、衣類、短・長靴および他の消費財の市場は全国的な拡りをもち、そしてこのことは自給生産の衰退と、特化と分業の成長を反映していた。消費財産業に代えて機械と鉄製品に対する派生需要が増大した。綿花貿易はこの地域的特化を促した直接の推進力であって、1830年代の綿花所得の増大は、この10年間の工業成長のスパートに影響を与えた最も重要な近因であった。」Douglas C. North, *The Economic Growth of the United States, 1790-1860*, New York: Norton, 1966 (1961), p.167. カレンダー=シュミット=ノース説の生命は、1815年以降のアメリカ経済の発展は、市場の発見、それも国外市場の発見に依存していた、という共通の認識にある。たとえばカレンダーは、建国直後のアメリカにおける、とりわけ内陸部における小製造業の簇生が、そのままではアメリカの資本主義の発達に結びつかず、言葉をかえれば、A・スミスのいうアメリカの前進的展望が実現されるためには「外部の世界との通商を持たねばならない」と主張したのである。G. S. Callender, 'The Early Transportation and Banking Enterprises of the States in Relation to the Growth of the Corporation,' *Quarterly Journal of Economics*, XVII, 1902-3, pp.117-19. したがって楠井氏が止目した「西部」の「局地的消費市場」の発達にしても、ノースの場合には、穀物輸出という export-base theory によって媒介することではじめて前進的展望を持ちえたのであって(この点「北東部」の工業の発達が綿花輸出によって牽引されたというのと変わらない)、ステイブル商品の市場が外部に見出せないかぎり、農民層の分解にもとづく商品生産の発達、要するに社会的分業の発達は起こりえない、という理論的枠組になっているのである。

- (6) 研究動向については、Glenn Porter (ed.), *Encyclopedia of American Economic History*, New York: Charles Scribner's Sons, 1980, Vol. I の国内商業の項目を参照。
- (7) 需要牽引型の成長論、すなわち市場=需要の増大→特化・分業の拡充→経済構造の変化→生産性の増大→成長の加速、という成長経路の認識はスミスに発している。「外国貿易の利益」あるいは「アメリカの発見」の市場的意義に言及している『国富論』第4篇第1章(中央公論社版・Ⅱ、106-109ページ)を参照。

- (8) Alfred D. Chandler, Jr., *The Visible Hand*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1977, p.75 note 75.
- (9) Diane Lindstrom, 'Southern Dependence upon Interregional Grain Supplies: A Review of the Trade Flows, 1840—1860,' *Agricultural History*, Vol.44, No.1, 1970. Cf. Harry N. Scheiber and Stephen Salsbury, 'Reflections on George Rogers Taylor's *The Transportation Revolution 1815—1860*: A Twenty-five Year Retrospect,' *Business History Review*, Vol. LI, No.1, 1977.; Stephen Salsbury, 'Economic History Then and Now: *The Economic History of the United States* in Light of Recent Scholarship,' *Agricultural History*, Vol.53, No.4, 1979.
- (10) その要旨は *Journal of Economic History*, Vo.35, No.1, 1975 に載っている。
- (11) 本書の書評は次の雑誌に見られる。  
*Business History Review*, Vol. LIII, No.2, 1979 (Jeremy Atack); *American Historical Review*, Vol.84, No.1, 1979 (Stuart B. Blumin); *Journal of Economic History*, Vol.38, No.4, 1978 (Robert E. Gallman).
- (12) この点に関する著者の認識は決してノースにひけをとらない。
- (13) Stanley L. Engerman, 'Douglas C. North's The Economic Growth of the United States, 1790—1860 Revisited,' *Social Science History*, Vol.1, No.2, 1977.
- (14) 「セクション間トレード」の大きさについて最初に数量的な根拠から批判した文献は, Albert Fishlow, 'Antebellum Inerrregional Trade Reconsidered,' *American Economic Review*, Vol. LIV, No.3, 1964 である。
- (15) Robert Zevin, 'The Growth of Cotton Textile Production After 1815,' in Robert Fogel and Stanley Engerman, eds., *The Reinterpretation of American Economic History*, New York: Harper & Row, 1971, pp.122—47. ゼヴィンはニューイングランドの棉製品の販売市場を先験的に西部に掃している。この点でウェアの先駆的研究と同じ理解に立つものである。Cf. Caroline F. Ware, *Early New England Cotton Manufacture*, Boston: Houghton, 1931.; 楠井敏朗, 前掲論文(1), 13ページ。
- (16) ノースが次のように述べていることを指摘した方が著者は公平であつただらう。「この時代(1807—14)のフィラデルフィアの繁栄は他の大海港都市と対照的であつた。それはこの都市の工業の急速な発展を反映するものであつた。」Cf. Douglas C. North, *op.cit.*, p.56 note 16.
- (17) 「1850年代末には、一部の繊維機械はセクションの境界を越えて移出されていたが、他方蒸気機関は依然として注文に応じて生産されていた。」Diane Lindstrom, 'The Industrial Revolution in America,' in Sidney Pollard (Hg.), *Region und Industrialisierung*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980, p.77 note 38.
- (18) 後出の「1人当り実質生産高」に関する議論を参照。
- (19) デラウェア川下流域のこの時期の急速な工業化、とくに機械工業の発達は1975年に「地域経済史研究センター」が創設されて以来、大きくクローズ・アップされるようになった。同研究センターの活動については別稿で紹介したい。さしあたり、Glenn Porter (ed.), *Regional Economic History: The Mid-Atlantic Area Since 1700*, Gseenville, Del.: Eleutherian Mills-Hagley Foundation, 1975 を参照されたい。

- ⑳ 著者がウォーラーステインやフランクラと共有するこの種の風味は、一見無味乾燥な本書の統計的操作を味わい深くしているが、厳密に言えば、セクション間次元での「地理的・部門的バイアス」は従来も研究されてきた。
- ㉑ Fishlow, *op. cit.*. ノース, ウォルシュもフィッシュローと同じ意見である。Cf. North, *op. cit.*; Margaret Walsh, *The American Frontier Revisited*, London; The Macmillan Press, 1981, pp.18, 54.
- ㉒ ニューイングランドの紡績企業家と対比しつつフィラデルフィアのその「企業精神」の保守性を指摘する顕著な例としてはウェアの前掲書がある。とくにその第1章を参照。
- ㉓ これはコ克蘭の「アメリカ文化の衝動力を所与とすれば」という表現を振ったものだが、ウェイクフィールドのこの認識の方がより現実的であったろう。『イギリスとアメリカ』の第11稿(訳書第2分冊, 158ページ)を参照。コ克蘭については次注を見よ。
- ㉔ Thomas C. Cochran, *Frontiers of Change: Early Industrialism in America*, New York: Oxford University Press, 1981, p.99.
- ㉕ Diane Lindstrom, 'The Industrial Revolution in America,' p.82.
- ㉖ *Ibid.*, p.83.
- ㉗ Cochran, *op. cit.*, pp.50, 65-77.
- ㉘ 「地域経済史研究センター」の発足時に開かれた Planning Conference でイースターリンらと共に基調報告を担当した J.A. プラットが、テイラーやブルシェイの植民地時代の研究があることはあるが、「だが、植民地経済の核を形成していた the local, agricultural-based economic systems の展開についてはほとんどなにも知られていない」と指摘したうえで、さらに既存の研究がニューイングランドの諸タウンに偏っている点をあわせ指摘している。リンドストロームはこの会議に出席していたというだけでなく、A. F. C.ウォーレスと共に同センターの企画——ポーター編の報告集の表題がそれ——遂行上の「車の両輪」とでもいうべき役割を負わされていた。以上の経緯については前掲のポーター編の報告集を参照。

[紹介者の務めとして本書の資料作成並びに資料操作の問題に言及すべきであったかもしれないが、内在的、建設的ないわゆる資料批判は不可能なので断念せざるをえなかった。筆者にせいぜいいえることは、本書のモデルにとってもっとも重要な意味をもつはずの石炭および人口に関する単独の、コンシステントな統計が欠如しているということである。]